

INTERVIEW 12

大野 敏

建築史・建築芸術研究室教授



Profile

おおの・さとし /1984 横浜国立大学工学部建築学科卒業 1984-1990 (財)文化財建造物保存技術協会 1991-1998 川崎市日本民家園 1999-2014 横浜国立大学助教授/准教授
2014- 横浜国立大学院 都市イノベーション研究院教授
専門分野:日本建築史・保存修復

—まず全体への総評をお願いします。

今年度の卒業設計は、地域再生(活性化)をテーマとするものが極めて多かったという印象です。立地は都心から農山漁村、時間軸は近世から現代、多様な建築種別(庭・道など含めて)、規模の大小、新築と既存再生など、視点・対象・手法は様々ながらいずれもその場所性をしっかりと把握したうえで、課題をあぶりだし、自らの解決法を提示する中で地域(対象区域)の魅力増進に寄与しようとする意識の強さを感じました。また、土地の高低差を活かした垂直動線移動に注目した作品が目立ったのも印象的でした。

私の専門である建築史の研究分野でも、純粋な様式研究や文献研究よりも「保存」というジャンルに関心を持つ人が大変多くなっています。研究対象をどう社会と結び付けていくのか?建築の場合は、本質的に社会とのつながりが高いものですが、実学としての建築のあり方があらためて注目され、期待されていることを強く感じる卒業設計だったと思います。

また、新型コロナウイルスの影響を言い訳にするような未完成作品がなかった点も印象に残っています。未曾有の危機の中で、全体として質の高い内容であったことは、皆さん一人一人がしっかりと精進してくれた結果であると、頼もしく感じました。

—全体の中で歴史研という立場から見て面白いと思った作品はありますか。理由もお願いします。

場所の歴史性を強く意識したものとして、亀井美里さんの「お湯暮らし」、寺西遥夏さんの「まちの文化と記憶を紡ぐ庭園」、西尾昂紀さんの「庭がつくる街」、上山源喜さんの「街区裏でつながる赤津焼の町」、正林泰誠さんの「漁村の道で育つ」、東野有希さんの「集落を雪囲う」、榎原真歩さんの「守り・つなぐ・山」などがありました。

亀井さんの作品は温泉町の共同浴場を通したこれからの地域コミュニケーションの在り方の提案で、新旧建物のバランスや図面の描写が良かったと思いますが、対象地以外の小規模温泉町の実態調査を加えて考察できればより充実したと思います。

寺西さんの作品は地区の特性をよく捉えていて、考え方には賛同します。ただ地域の建築の歴史的な特性を銅板葺屋根と考えることが果たして妥当なのかは再度考えてほしいところです。



亀井美里 「お湯暮らし」 (p12)



寺西遥夏 「まちの文化と記憶を紡ぐ庭園」 (p20)

西尾さんの作品は、ちょうど本研究室の修士研究において藤堂藩染井屋敷の実態解明が進んでいたこともあって大変興味深かったです。

上山さんの作品は、古くからの地場産業が醸成してきた地域景観をうまく捉えた作品と感じました。

正林さんの作品は、地域にのめり込んで、その将来をともに考えようという姿勢と溢れるエネルギーを感じて(粗削りながら)楽しく拝見しました。

東野さんの作品は、世界遺産に隣接する伝統的集落の継承の在り方に対して、真摯に取り組む姿勢は大いに共感しました。ただし解決方法としては、様々な検討した末にそこに至ったのかについては検証して欲しいと思います。



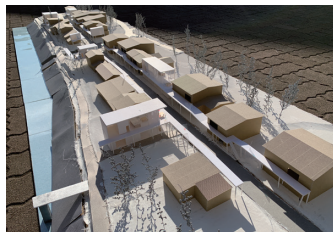
西尾昂紀 「庭がつくる街」 (p28)



上山源喜 「街区裏で繋がる赤津焼の町」 (p100)



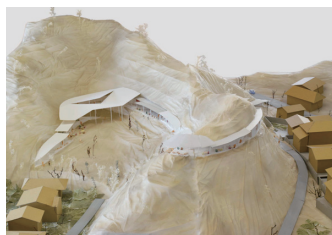
正林泰誠 「漁村の道で育つ」 (p92)



東野有希 「集落を雪囲う」 (p154)

榎原さんの作品は切通しをテーマとして、高低差を垂直動線移動の面白さと捉えて地域再生に活かしていこうとする意欲的なものと理解しました。ただし作品自体が切通しの本質を表現しているか否かについて私自身は疑問でした。

なお、上記にとりあげませんでしたが、垂直動線移動の面白さと建築史的視点を持った作品として阿部ほなみさんの「歩行そのものが居場所になる」もあります。阿部さんは本研究室で卒業設計に取り組んでくれたので、春学期の建築ゼミにおいて、歩き回って空間体験を重ねて感性を磨く点と、垂直動線移動に興味を持っていることは理解していました。ゼミの時は上星川から川島町あたりの河岸段丘をいろいろ調べていたので、最終的に山手になったことは少々驚きでしたが、面白い提案にまとめたと思います。



榎原真歩 「守り・つなぐ・山」 (p192)



阿部ほなみ 「歩行そのものが居場所になる」 (p68)

—なぜモダニズム以降の日本建築史、西洋建築史の授業がなく、洋式(様式)を中心としたモダニズム以前の建築史を中心に学ぶのか教えてください。

モダニズム以降の建築の様相は、まだ歴史記述としてとらえることは妥当でない(様々な考えが試みられており、それらについての評価が定まっていない)という事かと思います。

—最後にこれからの学生や卒業設計に期待することはなんですか。

とにかく自分の五感を使って現場を何度も確認して、自分の感覚を磨き上げてほしいと思います。同時に、その考えが「独りよがりなもの(一面的なものの見方)」になっていないか)いろいろな覚悟から検証してください。

また、図面をきちんと描けるようになって欲しいと思います。

(建築史・建築芸術研究室へのインタビューは文書でお送りした質問に回答していただいています。)

守田 正志

建築史・建築芸術研究室准教授



Profile

もりた・まさし /2001 東京工業大学工学部建築学科卒業 2001-2004 同大学大学院総合理工学研究科人間環境システム専攻修士課程修了 2004-2008 同大学大学院博士課程修了
2015-横浜国立大学院 都市イノベーション研究院准教授
専門分野:建築史・都市史・イスラーム・地中海地域・西洋建築史

—まず全体への総評をお願いします。

制限の多い中、例年以上の完成度の作品が多かったかと思います。まずは、皆さんの奮励に称賛を送りたいと思います。日常生活が大きく様変わりする渦中に卒業設計をすることになった皆さんだからこそ、世情を肌で感じることができ、その実感を咀嚼することでリアリティを伴った地域問題の解決提案にまで昇華できたのだと思います。

年々、巨大な建築物1棟を設計する提案が少なくなってきたのは残念に感じますが、これも時代性なのかもしれません。日本は既に生産性の拡大に伴う経済発展を無邪気に信じることでできない状況にあり、巨大建築物、あるいは大規模再開発の正当性や魅力が失われているのかもしれません。同時に、巨大建築物、あるいは大規模再開発の周辺への影響力の大きさを考えると、その実現可能性を卒業設計で細部にわたって検討することも容易ではないでしょう。とはいえ、ある意味で自由な設計をすることのできる卒業設計で、無責任なようではありますが勢いのある提案も見てみたいという気持ちもあります。そうした提案に果敢に挑戦してくれた学生がいたことも頼もしく思いました。

最後に梗概ですが、個人的には提出を課している以上、真摯に読み込み、採点の対象としています。藤原先生をはじめとするAD系の先生方のご指導の賜物だと思いますが、今まで見てきた中で一番まとまっていました。設計とは、図面や模型で自身の考えを表現することの比重が大きいののは当然ですが、やはり言葉で、文章でまとめる力も肝要です。図面や模型と文章、どちらもバランスよく表現力を磨いていってください。

—まず全体への総評をお願いします。

寺西さん: 講評会でも述べましたが、歴史的景観が残された地区の保存・再生というと、なかなか新たな意匠を付加することが難しい、むしろ思考停止のように現状の維持や当初復元としてしまいがちです。その中で、その地域の歴史性を重視し、その魅力を引き出すような作為にのみ留まらず、自らがその地域の新たな歴史を紡いでいく仕掛け(銅板葺き屋根)を積極的に提案している姿勢を頼もしく思いました。

河野さん: 吉原賞を受賞したので多くを語る必要は無いとは思いますが、私が特に注目したのは袋小路を利用した新たなコミュニティの場を創出しようとした点です。東京西部の大規模郊外型住宅地開発では、こうした袋小路は淘汰されていきました。しかし、袋小路だからこそ、車の侵入を防ぎ、路上での近隣者との安心した接点を提供できるはずです。地域特性をよく観察した提案だと思います。

他にも高評価した提案は、上山さん、前本さん、木幡さんの提案です。特に、木幡さんの既存のビルを繋ぐことで新たな建築空間を発生させる提案は、自身の卒業設計での提案(木幡さんほどの完成度はありません…)を思い出してしまいました。



寺西遥夏 「まちの文化と記憶を紡ぐ庭園」
(p20)



河野美紀 「いつまでも、この街は私の実家」
(p60)

—都市科学部になったことによる卒業設計の変化や、課題や学生の変化など感じるところがあれば教えてください。

初めての卒業生ということもあるのと、自身の着任が6年前なので都市科学部生との接点の方が長いので、それ以前との比較が少し難しいです。それと、今年度はそれ以上に世情が大きく異なっていますので、何かしらの変化があったとしても都市科学部での学びの結果というより、その影響の方が大きいのかなと。

—なぜモダニズム以降の日本建築史、西洋建築史の授業がなく、洋式を中心としたモダニズム以前の建築史を中心に学ぶのか教えてください。

モダニズム以降は、現在進行形であり、また、歴史的評価を下すには時間の洗礼を十分には受けていないからです。現在の建築物を個人的主観であれこれ評価することはできますが、客観性を持ちつつ同時代あるいは少し前の時代の他の事象を結び付けて考察・検証するには、もう少し時間がかかります。むしろ、そうした現在進行形の建物をどのように見ていくのか、理解していくのか、解釈していくのか、学生の皆さんにその方法論を一程度の評価の定まった過去の建築の流れを通して身につけ、自身で実践してもらおうのも、建築史の講義の目的の一つです。

とはいえ、近代建築史Aではモダニズム以降のポストモダンなどには多少触れますが、皆さんの学年の時は時間切れで講義ができなかったかと思います。その点は、大変申し訳ありませんでした。

—最後にこれからの学生や卒業設計に期待することはなんですか。

日常生活空間の変化がこれまで以上に急速になる時代です。常に周囲の動向にアンテナを張り、時には建築に関係ないように思えることにも興味を持って、色々と吸収してもらいたい。学生生活の自由な時間だからこそできることであり、他分野(特に文系科目)との融和を図るのが都市科学部の特徴でもあるので、その利点を有効活用して、実りある学生生活を送ってほしいです。